



令和6年5月28日(火)～7月15日(月・祝)

素描の魅力
創作の裏側に迫る



鹿児島市立美術館 KAGOSHIMA CITY MUSEUM OF ART
〒892-0853 鹿児島市城山町4-36 TEL099-224-3400
https://www.city.kagoshima.lg.jp/artmuseum/

2024年 初夏号
No.28

市美だより

鹿児島市立美術館 | KAGOSHIMA CITY MUSEUM OF ART

発行 鹿児島市立美術館

〒892-0853

鹿児島市城山町4番36号

TEL(099)224-3400



無料開放日のお知らせ

毎月第3日曜日は、小・中学生は無料開放日

です。所蔵作品展 + 小企画展を

無料で鑑賞いただけます。

6月16日(日)、7月21日(日)



《ベルト・レイズの肖像》1952年
油彩・キャンバス縦73cm×横60cm

ンクとは対照的に、鮮やかな色彩と生への喜びに満ちた軽快なデュフィの作風は、運動の中心人物であったマティスに近いものがあります。

1909年、まだ無名だった若きデュフィは、後に「20世紀ファッションの王様」と呼ばれることになるポール・ポワレと出会います。使

て

箆のレターヘッドのデザインを手がけ、そこからテキスタイルの原画を任されるなど、二人は

しばしばコラボするようになりました。本作の

ような油彩画でも、そこで培われたおしゃれな

ファッション・センスをかいま見ることができ

ます。ベルト・レイズは晩年の画家の面倒を見

た女性で、他のいくつかの作品でもモデルを務

めています。心を通じ合わせたお互いの関係性

が、描かれたベルトの表情からもよくうかがえ

ます。

初夏の所蔵品展 (西洋美術+郷土作家+特集コーナー)

ミニ特集：生誕120年 海老原喜之助と吉井淳二

会期：5月8日(水)～7月7日(日)

ミニ特集では、ともに1904(明治37)年の鹿児島に生をうけ、昭和の洋画壇を代表する存在となった海老原喜之助と吉井淳二にスポットを当てます。1917(大正6)年、鹿児島県立志布志中学校(現・志布志高校)で出会った二人は、饒舌で豪快な海老原と、寡黙で温厚な吉井という対照的な人柄ゆえか、逆に意気投合したようです。

今回の展示では、二人のほぼ同時期の作品を比較しながら鑑賞

していただきます。また、彼らと関連のあった作家たちや二人が発掘した大嵩禮造ら次世代の作家たちの作品も紹介します。



海老原喜之助《魚》1927年



吉井淳二《踏切》1927年

ラウル・デュフィ

《ベルト・レイズの肖像》

20世紀の初めに、自由奔放な色使いで“色彩の革命”を起こしたフォーヴィスム(野獣派)。

デュフィはこの運動の画家として知られていますが、その後、独自の道を歩みました。これは近代以降の美術でよくみられる例で、そういう意味では、デュフィはフォーヴィストであった画家と言ってもよいでしょう。重厚な作風のドランやヴラマ

小企画展 5月8日(水)～7月7日(日) 素描の魅力～創作の裏側に迫る

「素描」は、フランス語ではデッサン、英語ではドローイングまたはスケッチと呼ばれる線描を主とした表現です。旅先でのスケッチ、モチーフの研究やふとしたアイデアを描きとめた紙片、完成作品のイメージをまとめた習作や下絵など、多くは人に見

せることを目的に描かれたものではありませんが、作品化される前の臨場感溢れる表現は独自の魅力を放ち、美的価値を兼ね備えたものも数多くあります。

明治後期に東京美術学校に在籍し、西洋画の基礎を学んだ時任鵬熊らの人体デッサン。モチーフとなる対象を繰り返し描き研究成果を創作に結び付けた日本画家・満田天民や洋画家・海老原喜之助、版画家・橋口五葉の素描。旅先の風景に取材し油彩画の大作を生み出した藤島武二や梅原龍三郎の風景スケッチ。和田英作の《野遊》(東京藝術大学蔵)や藤田嗣治の《争闘I》(エソンヌ県議会蔵)の下絵、彫刻家・ブルデルやマイヨールの思索の跡をうかがわせる素描、彫金家・帖佐美行のモダンな造形感覚溢れる

図案下絵…。

本展では、所蔵品の中から様々なジャンルの作家が描いた素描を、ときに完成作品も交えながら一堂に展示いたします。彼らの創作の裏側を覗き見るような、ワクワクした気持ちでご鑑賞いただけましたら幸いです。